

「今日をやわらかくする一枚。」

まいにち、なんども、使うものにこそ日常をちょっと良くする力がある

渡辺パイル織物株式会社

わたなべばいるおりものかぶしきがいしゃ



会社情報

所在地 愛媛県今治市南宝来町 2 丁目 8 番地の 1

電話番号 0898-66-5108

HP <https://www.watanabe-pile.co.jp/>

設立 1963 年

代表者 代表取締役社長 渡邊 千歳

従業員数 25 人



会社概要

1963年に愛媛県にて創業。「まだ世にないタオルをつくりたい」という初代から受け継ぐ情熱的なクラフトマンシップは、今もタオルづくりの工程のひとつひとつに息づいている。「織り」だけではなく、綿の産地へと足を運び、その素材の良さを最大限に活かすための紡績工程から職人たちと話し合いを重ねるなど、日々のタオルの新たな可能性に挑戦し続けている。



選定分野

サステナビリティ
(環境配慮)

廃棄から製品へアップサイクル

●施策：廃棄していた不良在庫や材料を、製品として再利用をする取組を始めた。

●成果：

事例1 廃棄予定の残布、糸を製品へ：生産時に発生した残布や残糸を捨てるのではなく、製品として再利用ができないかと考え企画をスタートした。残布に関しては化粧品会にアップサイクルハンカチとして採用され、ミニハンカチとして縫製をしオリジナルの刺繍を施し、10,000枚の販売実績となった。また、残糸を利用した「温泉マーク」柄のバスマットを作成したところ、レトロなデザインが目を惹き人気商品となっている。

事例2 廃棄予定の残布を糸へ：アパレル向けに作成した生地が残布を国内紡績会社にて反毛を行い、糸に再加工する取組をスタートした。サステナブルタオルとしてサンプル作成をおこなった。評判は良く、残布を捨てずに循環させる取組ができるのではないかと考えている。

事例3 廃棄していた糸屑を紙の生産へ：生産時に発生する捨て耳の部分に関しても廃棄ではなく、地元の製糸工場と連携し紙を作る際の補強のために余った布や糸等を利用している。月に400-500kgほどになり、以前は焼却処分していたため、CO2削減にもつながっている。



残糸を使用したバスマット



デジタル化

Eコマースのデジタル技術を用いた在庫削減

商品販売を行うEコマースを利用して、これまで廃棄をしていた不良在庫の販売に成功した。

●施策：不良在庫となったタオルや生地を、「特価商品」として従来プロパー商品を販売する際に使用しているEコマースのプラットフォームを利用して、販売会を行っている。

●成果：対面での販売会では人件費や場所代などの経費が発生するが、Eコマースを利用することにより対面での接客や場所が不要となり経費の削減に成功し、より効率的に不良在庫を削減することができる。また、限定公開をすることにより告知をしたい顧客を限定してお知らせをすることが可能となり、ブランド価値を下げることなく不良在庫の削減をすることができた。

集客についても工場のある愛媛でのイベントの場合は中国四国居住者が顧客の中心となるが、Eコマースを利用することにより全国各地の消費者に販売することが可能となった。新規顧客の獲得につながり、セール時期でない期間にもプロパー品を買い求める事例が増えてきている。

不良在庫となったタオルや生地の
特価商品販売画面



技術力やデザイン力による付加価値の創出

職人の技術と研究成果の蓄積

●施策：

・製織技術

織機の種類によって密度やパイルの出方が異なるため、表現したい柄や風合いのイメージに合わせて織機（シャトル織機・レピア織機・ドビー織機）の選定を行う。またジャカード技術により様々な柄を表現することが可能である。現在でも昭和36年製の今治産のシャトル織機が現役で動いており、繊細な原料を用いた生地開発を行うことが可能である。シャトル織機を動かすには技術を要するため、若手社員への技術の継承に取り組んでいる。

・糊付技術

糸に強度を持たせるための糊付作業において、従来の糊付作業では均一に糊付けをすることが難しく、製織することができる糸が限定されていた。「サイジングワインダー」を社内に導入し、糊の中を一本の糸ごとにくぐらせ糸に均一に強度を持たせることができるようになり、同社でしか製造のできない織物の幅が広がった。また、糸の種類によって糊の濃度のレシピが異なるため最適な糊付方法の検討が必要であり、独自の糊付けレシピの蓄積により唯一無二の織物の開発が可能となった。



シャトル織機製織の様子



新規性のある
事業・サービス

タオル織機を用いたアパレル向け素材開発

●施策：平成2年より約30年近く、タオル織機を使用したアパレル素材開発を行っている。機能としての吸水性が求められるタオルには綿を原料とすることが主流であるが、アパレル素材にカシミア、ヤク、シルクなどの天然繊維を中心に様々な原料を使用し開発を進めている。

●成果：現在ではメゾンブランドをはじめ、複数の国内ブランドとともに生地の共同開発を行なっている。商社を通さず直接取引をすることにより、取引先と互いにリスペクトをしい合いチームとしてものづくりを行なっている。タオルだけではなくアパレル生地開発にも取り組んできたことにより、唯一無二のものづくりとなり、会社の売上向上に繋がっている。

●略歴

1990年 服地の研究開発開始

1999年 「テキスタイルネットワーク展」 出展

2002年 「JFW ジャパンクリエイション」 出展、JFW ジャパンクリエイションテキスタイルコンテスト 入選

2004年 「クリエイションビジネスフォーラム」 出展、日本の若手デザイナーと共同で服地の開発を開始

2007年 レンチングファブリックコンペティションジャパン 入選

2008年 JFW ジャパンクリエイションテキスタイルコンテスト 入選

2012年 繊維・未来塾発足 運営委員として繊維に関わる若手経営者を育成、ニットや染めなどを得意とする他産地との共同開発を開始



同社生地を使用したアパレル製品



海外展開

クライアントに合わせたものづくりで生産を受託

●施策：取引先各社それぞれのブランドのコンセプトやイメージを理解した上で、ブランドごとにサンプルを作成し、プレゼンを行っている。できるだけ最終のクライアントに近い位置でのものづくりを行うことにより、先方の作りたいイメージが明確となり、また同社でできる技術やキャパシティなどを共有することによりスムーズな取引が可能となっている。

●成果：

事例1 フランスのメゾン向けに生地のOEM生産を受託している。2010年ごろから取組が始まり、毎シーズンテーマに合わせた生地提案を行い、サンプル生産の後、バルク生産となる。タオルでは通常使用しない糸や素材を用いて先方のイメージに近づけ、生地売上の柱となっている。

事例2 アメリカのブランド向けに、現地にあったタオルの提案・OEM生産を受託している。2015年頃からタオル作りをスタート。日本にないサイズの規格に合わせて織機を改造して製造している。柄を毎シーズン変えてOEM生産が続いている。

事例3 アメリカのニューヨークを拠点とするストリートファッションブランドに生地の提案、OEM生産している。同社の取締役が2015年にニューヨークでインターンをしていて出会ったデザイナーと現在も親交が深く、定期的に生地サンプルを送り、主に帽子生地として採用されている。



海外のクライアント向けに開発をしたジャカード生地